2000. 1. 10

言葉の眼差し１～ ラフマニノフ「ヴォカリーズ」

言葉の眼差しは、いつも憧れに満ちていた。

自分のＨＰを持ったどうか、と初めて薦められた際、正直言って戸惑った。
作るとすれば、自分が最も親しんでいるものを載せるしかないだろう、そしてそれは、言葉と音楽だろう、と考えた。なぜなら、この二つは、若い頃からいつも両隣にいて、様々な抒情を、様々な風景を、様々な打撃を、様々な慈しみを浴びせ掛けてくれたものだからだ。

言葉が発せられると音楽が身体を揺らし始めるし、音楽が流れ出すと言葉が歌い出そうともじもじしだす、とかいった具合だった。

ただし、僕の場合、両者の立場は全く異なっていた。

音楽の場合は、すでに完成されたものとして、記憶の底から自然と聞こえてくるのに対し、言葉の場合は、（実にあやふやでぐらぐらした階段を）感性の底からなんとか這い上がってくる、という感じだろうか。

詩なり文章なりを書いて何かを表現しようとしていると、音楽が聞こえ出し、「さあ、こんな感じではあるまいか？」と囁き出すと、言葉の方は「そうだね、そうだね」と答えながら、音楽に対してうっとりとした眼差し―――憧れに満ちた眼差しを向けることになる。強引に言ってしまえば、言葉は音楽の従者だったのだ。

音楽を言葉で表現するなどということは無理なのかもしれない。しかし、音楽的表現というものはあるのかもしれない、と常に性懲りもなく考えている。なにかを書くときには、どうしてもそのことを考えないではいられない。

これからも、僕は書いてゆくのだろうが、その中の言葉たちは、常に音楽に対して、憧れに満ちた眼差しを切なく向ける事になり続けるのだろう。「どだい、言葉なんて無力なのかもしれない」と、時折は思いながらも…。

この曲のソプラノによる歌には詞がない。

この曲の中に、毎日を「音楽」の隣に並んで過ごしていながら、極めて切ない憧れに満ちた「言葉」の想いと似たものを感じてしまう。詞のないソプラノの歌声は「何も私は表現できない」という「言葉」の呟きそのままのような気がする。